ヒマラヤ学誌　*No.17, 146-153, 2016*

チベット仏教の世界
―仏教伝来からダライ・ラマへ―

吉水千鶴子

筑波大学人文社会系

チベット民族には政治から人々の日常生活にいたるまで、すみずみまで仏教が浸透している。その歴史的背景を探ると 7 世紀の仏教伝来に遡るが、国家仏教として取り入れられた事情は日本と相通じるものがある。その後も仏教は国の政治と密接に関わり、チベット民族の重要な外交手段となっていった。元朝、明朝、清朝という強力な中華王朝に対し、彼らは仏教を広めることによって内陸アジア一帯にチベット仏教文化圏を形成し、自らの生き残りを図った。その過程で生まれたのが転生活仏ダライ・ラマを頂点とする政教一致の政治体制である。

一方、仏教はチベット文化の核であり、チベット民族ばかりなくモンゴル、ネパール、ブータンの多くの人びとの精神的支えである。僧院ではさまざまな学問が行われ、インドから伝えられた仏教の教義が研究され、チベット独自の発展をとげた。現在も続くチベット仏教の主要な宗派は 12 世紀から 15 世紀の間に誕生している。

今のチベット系民族は、中華人民共和国内の西蔵自治区、四川省、青海省、雲南省、甘粛省などの地域と、ネパール、ブータン、インドのラダック地方に居住するほか（地図 1）、チベットから亡命した人々とその子孫が世界各地に分散している。ダライ・ラマの亡命政府はインドのダラムサラにある。ばらばらになった彼らを繋いでいるのも仏教である。チベット民族のアイデンティティとも言える彼らの仏教の世界を、その始まりから 17 世紀のダライ・ラマ政権成立に至る礎の時代を通して紹介する。

Ⅰ. チベット民族の歴史

チベット民族の歴史は、古代（漢語で「吐蕃」と言われる古代王朝の時代、7 世紀～ 842 年）、中世（氏族教団と元朝支配から活仏教団誕生の時代、842 年～ 1642 年）、近世（ダライ・ラマ政府と帝国主義列強のアジア進出の時代、1642 年～ 1949 年）、現代（中華人民共和国による併合と民族離散の時代、1949 年以降）に分けられる。以下に取り上げるのは、古代と中世である。チベットの近現代史は、アジアが欧米の植民地支配と対峙し大きく変化していく世界史に重なり、1949 年の中華人民共和国成立に伴う人民解放軍によるチベット開放宣言、1959 年のダライ・ラマ 14 世の亡命と民族離散へ至る長いプロセスである。それに対して古代と中世は、チベットが周辺民族の圧力を受けながらも、チベット仏教文化圏を拡大していく過程と言ってもよい。力強く、したたかな発展の時代である。

Ⅱ. 仏教の伝来―古代王朝時代―

1. 時代背景

現在の西蔵自治区のラサを中心とする中央チベット地域に統一王朝が出現したのは 620 年代のことである。ヤルルン王家 6 代目のソンツェン・ガンポ王がこの地域を統一し、やがてそれは領土を拡張しながら唐と肩を並べる強大な国家へと発展する（地図 2）。その息子グンソン・グンツェンは、唐から文成公主、ネパールからティツゥンという妃を迎えた。チベットに公に仏教をもたらしたのはこの二人の女性であった。釈迦の教えである仏教がインドで生まれたのは紀元前 5 世紀頃、それは数百年の時を経て、南アジア、東南アジア、中央アジアへと広まり、中国、朝鮮半島にまで届いていた。隋、唐は仏教文化が華開いた王朝である。インドに隣接するネパールは釈迦が生まれた地でもあり、仏教国であった。二人の妃はそれぞれラモチェ寺、トゥルナン寺を建立し、仏

像を祀った。これがチベットで最古の寺院と言われる今日の小招寺、大招寺（写真）である。その後710年に当時7歳であったティデ・ツクツェン王に唐から金城公主が嫁ぎ、さらに仏教への信仰が高まり、次のティソン・デツェン王のときには仏教を国教とすることが決められた（761年）。インドから高僧シャーンタラクシタを招き、チベットで最初の僧院サムエーの建立が開始された。この頃唐の弱体化に乗じて領土をさらに広げ、786年にはシルクロードの要衝である敦煌を支配下に治め、仏教文化の発展を享受した。しかし、842年、ときのダルマ王が暗殺され、その後継者争いによって王朝は分裂、古代の繁栄は幕を閉じる。

2. 仏教伝来とはどういうことか

仏教が伝来するとはどういうことだろうか？具体的には何がもたらされたのだろうか？それは次の3つである。

仏（仏の姿、仏像＝信仰の対象）
法（仏の教え＝経典）
僧（その教えを学び伝える担い手）

仏教ではこの3つを「三宝」と呼び、大切にする。まず「仏」とは仏教の開祖釈迦であるが、それはどのような姿をし、どのような人であったのか、信仰と尊敬の対象であるその姿を模した仏像が必要である。チベットでは646年に文成公主が唐から取り寄せた釈迦像が公に記録された最古の仏像であり、これは今日大招寺に祀られる釈迦像だと言われている（最初は小招寺に祀られた）。この釈迦像の招来をもってチベットでは仏教公伝とする。日本への仏教の公伝は朝鮮半島の百済の王より釈迦像と経典などが献上された時（552年と538年の二説がある）であり、それに類似している。仏像がもたらされれば当然それを祀る寺が必要である。日本では法興寺、元興寺、飛鳥寺、四天王寺などが、チベットでは先述のラモチェ寺、トゥルナン寺などが建立された。

さて、釈迦像が祀られ、寺院が建てられたが、ではその教えはどのようなものか、それを知らなくては信仰することはできない。「法」とは仏の教えを指し、それが書かれたものが経典である。日本の場合は漢訳された経典がもたらされ、学ばれたが、チベットの場合、漢語やインドの言葉を理解できる者はほとんどいなかった。そこで翻訳が必要となる。チベット人を留学僧として派遣したり、インドの僧をチベットへ招いたりして、共同での翻訳事業が開始された。現在チベット大蔵経と呼ばれる経典はおよそ150巻を数えるが、その翻訳は古代王朝時代に始まったのである。

次は「僧」の育成である。仏教では「出家」と呼ばれる僧侶が教団を作り、仏教の教えの伝承、教育、布教を担う。「出家」になるためには、仏教修行者としてさまざまな戒律（道徳規則）を守るという誓いを立て、師について学ばねばならない。インドから師僧が招かれ、僧侶が共同で生活する場所である僧院が建てられた。最初の僧院がサムエー僧院である。チベットでは今日でも僧侶は一般に妻帯せず、自分の財産は持たず、酒も飲まず、生涯戒律を守って暮らす。それはダライ・ラマでも同じである。

3. なぜ仏教を国教としたのか

寺院や僧院の建立、翻訳事業、これらにはすべて費用がかかる。チベットで短期間に仏教の導入が進んだのは、王朝がスポンサーであったからである。王朝はこれらの事業を推進し、ついには仏教を「国教」すなわち国の宗教とすることを決めた。これが仏教国家としてのチベットの将来の土台を作ったことは明らかである。ではなぜ王朝は仏教を国教にしたのだろうか？ここにも日本との共通性を見出すことができる。

日本では仏教伝来当時、仏教の輸入について推進派と反対派が議論したと『日本書紀』は伝えている。推進派の蘇我氏は「西の国々ではみな仏教を信仰している、なぜ日本でも信仰しないのか」と述べたと言われる。「西の国々」とは日本から見ると、中国、朝鮮半島を指し、さらには仏教発祥の地であるインドも含むかもしれない。近隣諸国はみな仏教を信仰していた。とくに隋、唐の歴代王朝では都長安を中心に華麗な仏教文化が花開いた。仏教を信仰することは先進国、文化国家の証しでもあったのである。奈良時代に入ると国分寺が各地に建てられ、聖武天皇により東大寺に大仏が建立され、仏教は国家によって管理されるようになる。まさに国の宗教となり、文化の中心となった。数々の寺院に彩られた奈良の都は、これら「西の国々」の人々に日本が文化国家の仲間入

りをしたことを示す場ともなったのである。

チベットも周囲を仏教国家に囲まれていた。唐、ネパール、インドでは仏教が盛んであった。チベット古代王朝は軍事力をもって大国となったが、文化の力はこれらの国々に遠く及ばなかった。チベットも文化国家の仲間入りをするには、仏教の導入を急がねばならない。国の為政者はそう考えたのであろう。

今日のサブカルチャーも含めた多様な文化をもつ私たちからは想像しにくいことだが、この時代の文化はどこであれ宗教がその中心となっている。仏教は学問の核であり、文化の核であった。仏教は人生の真理を解き明かす哲学や人が守るべき道徳倫理を教え、釈迦の生涯や仏菩薩の姿を描く美術や彫刻、踊りや演劇などの芸能、寺院建築など多様な文化を生み出したのである。

4. 土着の信仰との摩擦

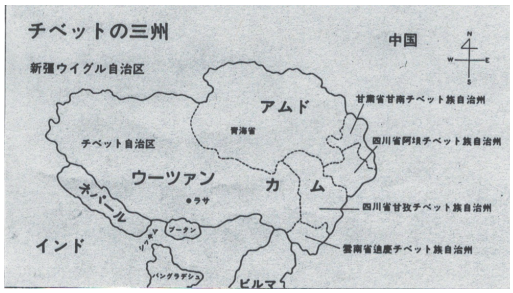
日本の仏教伝来当時、蘇我氏は仏教推進派、物部氏は反対派であったと言われる。日本には古来の神々がいる。外来の仏を信仰すればこれら神々の怒りを買うであろう。反対派は、疫病の流行などは仏教導入のせいだと主張した。チベットでも同様のことが起こった。仏教反対派は、災害や疫病が起これば、土地の神々の怒りだと怖れた。チベットでは、現在はポン（またはボン）教と呼ばれる宗教の源となった土着の信仰が存在していた。自然を崇拝し、霊の存在を信じ、死後は黄泉の国ならぬ死者の国へ旅立つと教える。仏教と大きく違うのは「動物犠牲」を行っていたことである。死者が死者の国へ旅するときにお供する動物を葬送儀礼として殺す習慣である。王家のこうした儀礼を実施していたのがポンの祭司であった。ところが仏教では殺生を固く禁じている。殺生はもっとも重い罪である。国の仏教導入をめぐる賛成、反対の争いは、政治的権力闘争の側面もあるが、国家祭祀を担う司祭階級の権益をめぐる争いでもあったのである。

土着の神々の怒りを鎮めるため、チベットの王はインドから行者パドマサンバヴァを招き、魔術の力で土着の神々を抑え、仏教を守る神に変えさせたと言われている。日本でも日本の神々は仏教の仏や菩薩が姿を変えたもの、という本地垂迹説が生まれ、仏教に土着の神を融合しようとする考えが起こったが、明治初期の神仏分離によって切り離された。チベットでは今でも神々は仏教の枠組みの中で守護神の役割を担っている。

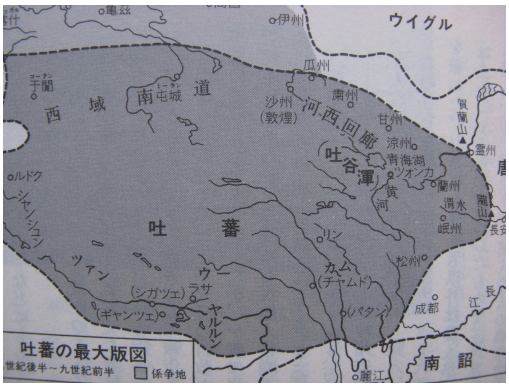
5. サムエーの論争というできごと―インド仏教対中国仏教―

仏教伝来をめぐる歴史的経緯を見ると、チベットには仏教が中国とインドの両方から輸入されたことがわかる。仏教はインドで発祥したとはいえ、中国へ伝えられると儒教や道教の影響を受け、中国人の考え方にそった発展をとげた。とくにチベットへ影響が大きかったのは、敦煌などの辺境地域で盛んであった禅宗である。敦煌から摩訶衍（まかえん）と呼ばれる禅僧がチベットへやってくると、禅宗がたいへん流行るようになった。インド仏教を信奉する人々はこれに反発し、国が禅宗を禁止すると今度は禅宗の徒が抗議自殺をするなど対立はエスカレートし、これを打開するため、ティソン・デツェン王はサムエー僧院で御前論争を行って決着をつけることにした。招かれたのは摩訶衍とサムエー僧院を建立したインド僧シャーンタラクシタの弟子カマラシーラである。チベットの言い伝えでは、摩訶衍は論争に敗れ敦煌に退き、インド由来の仏教が優勢となったという。しかしカマラシーラは何者かに暗殺され、一方、禅宗の影響は強く残った。この論争について情報の真偽のほどは定かでない。だが、当時のチベット王朝がインドの仏教をより重視したことは確かであろう。その後のチベット仏教はインドから輸入された経典や論書を中心に展開していく。

インド仏教が採用された理由については様々な憶測がある。政治的判断、優れた教義、仏教発祥の地であるインドへの崇敬などなど。だが、もっとも重要な決め手は当時のインド仏教が持っていた性格ではないかと思う。チベットに近い北インドでは、歴代王朝が仏教を保護してきた。王家の庇護のもとに大僧院が建てられ、多くの僧侶が集う教団が活躍していた。また大乗仏教の理想は慈悲である。国王は臣民のため、それを自ら実践するリーダーであった。一方、チベットに伝わった中国仏教の禅宗は敦煌という中国の中央からは遠く離れた地からもたらされたものであり、個人の悟りを追求し、王朝とのつながりはとくに持たなかった。為政者がこの二つを比較した時、インド



地図１　現在のチベットと周辺地域
（田中公明『活仏たちのチベット』９頁）



地図２　チベット古代王朝最大支配地域
（山口瑞鳳『チベット』（下）、35 頁）

写真１　小招寺（ラサ）

写真２　大招寺（ラサ）

写真３　大招寺で五体投地して祈りを捧げる人々

写真４　サムエー僧院

（写真提供：小林亮介 3、井内真帆 1、2、4）

仏教を国家経営による仏教推進により適したモデルとし、手本としたことは確かであろう。王は教団を保護し、人々のために慈悲を実践する理想の君主として政治を行うべきである。それは周辺諸国に対し、チベットの国家としての政治的文化的成熟のアピールともなったのである。だが、こうした古代王朝の理想国家は長くは続かなかった。

Ⅲ. 中世チベットの社会と仏教―氏族教団と元朝支配から活仏教団へ―

842年の古代王朝分裂後、チベット地域は政治的には混乱の時代が続いたが、国家の統制が失われた分、仏教は自由に民間に浸透することとなった。国が支える仏教から民衆が支える仏教へと変わっていったのである。一方、古代王朝期の遺産として仏教は広く東チベットから中央アジア地域へ流布し、この広範な地域で仏教用語でもあったチベット語が一種の公用語となっていた。前述の敦煌は仏教美術で有名であるが、同時に敦煌文書と呼ばれる多くの文献が発見されたことでも知られている。それらはチベット語、漢語、中央アジア諸語などの多言語で書かれ、ここが多くの民族が行き交う場所であったことを示しているが、彼らを結んでいた言語はチベット語であったのである。このチベット語とチベット仏教の広がりを基盤として、チベット仏教社会は新たな形を作り始める。

1. 氏族教団（宗派）の成立と元朝による支配

900年代末から1200年頃にかけてチベット各地で仏教が復興する。統一国家はないが、地方の有力な氏族が保護者となり、翻訳事業や僧院の建立を再開した。今日も続くチベット仏教の各宗派はほとんどこの時代に成立した。それらを支えていたのはその地域の血縁関係にある氏族であった。たとえばサキャ派という宗派はクン氏という一族が中央チベットのサキャに修行道場を建てたことに始まる。教団の最高位の住職は一族の者が相続した。このように氏族によって運営される教団を氏族教団と呼ぶ。同様にカギュー派が起こり、さらにディグン派、パクモドゥ派、カルマ派などに分かれた。後にダライ・ラマを輩出するゲルク派はもっとも成立が遅く15世紀である。

1200年代アジアを大きく揺るがしたのがモンゴル帝国である。日本の元寇は1274、1281年であるが、チベットは先んじて1239年、チンギス・ハーンの孫グデンの軍による侵攻を受ける。圧倒的な力をもったモンゴル帝国にチベットは抵抗する術をもたなかった。だが、交渉役となったサキャ派の高僧サキャ・パンディッタは仏教の力でこの危機を乗り越える。チベットの仏教外交の始まりである。チベットはモンゴルに多大な貢物を献上し、その命令に服した。だが、代わりにモンゴル人に仏教を布教し、彼らをチベット仏教の信奉者へと変えていったのである。彼の甥パクパは、モンゴル帝国分裂後の元朝皇帝となるフビライ・ハーンの仏教の師となり、「国師」そしてさらには「帝師」の称号を授かったのである。この関係によりサキャ派は特権を得て、元朝のもとでチベットを支配した。フビライの弟フレグは兄に従うのをよしとせず、チベットのサキャ派の敵対勢力であったディグン派、カルマ派と手を結びフビライと争ったが敗れ、ディグン派の僧院はすべて破壊され、僧侶一万人が殺されたという。チベットの諸宗派とモンゴルの諸族が結託して権力を争う時代の始まりであった。チベット仏教の血なまぐさい一面である。

モンゴル人がたやすくチベット仏教の感化を受け、元朝皇帝もが仏教徒となった背景を考えると、かつてチベット古代王朝が周辺の先進国から仏教を取り入れたのにも似た事情が窺える。モンゴル民族は草原の民であり、遊牧生活を基盤とする。軍事には長けていたが、定住生活を行わず、宮廷ももたないため、文化的には後進であった。そのモンゴル人が元朝を立て漢人を支配することになったのである。洗練された漢人の文化、中国仏教に対抗するために彼らはチベット仏教を取り入れたのではないだろうか。この時以来、モンゴル人たちはチベット仏教の有力な施主としてチベット内部の権力争いに関わり、軍事力をもって政治経済に介入する。そればかりではなく、モンゴルからも優秀な仏教僧を輩出し、チベット仏教を支えていくことになる。

2. 転生活仏制度の誕生

1368年明が元に取って代わるとサキャ派の勢力は衰え、パクモドゥ派が覇権を握ったが、それはやがてカルマ派と新興のゲルク派の争いへと変

わっていく。明朝の皇帝はモンゴル人ではなく漢人であったが、やはりチベット仏教へ傾倒した。チベット仏教の各宗派は、モンゴルや中国の有力者の支援を受けるための手段に心を傾けるようになる。そのような中、1409年ツォンカパという僧がラサ近郊にガンデン僧院を設立し、ゲルク派を興す。今でも続く正月の大祈願祭というお祭りを始め、民衆の圧倒的な人気を得た。これに危機感を抱いたカルマ派は転生活仏制度を導入する。

それまで宗派は血縁関係にある氏族が運営し、大僧院の住職もそこから選んでいた。この運営方法は安定しているが、多くの民衆の支持を得にくい。複数の氏族が手を組んで生まれ変わりを選出し住職の座につける新しい方法は、宗教者としてのカリスマ性を高め、より大きな民衆の支持、とくにモンゴルの有力者の支持を得るために効果的であった。こうしてカルマ派の黒帽派、紅帽派の最高位の僧侶は「生まれ変わり」の生き仏（活仏）によって相続されることになったのである。

このような演出を可能にした背景には、インド伝来の輪廻転生の教えが人々に浸透していたことがある。あらゆる生き物は自分の行いの善し悪しによって、死後生まれ変わる。日本にも伝わった六道輪廻は、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天という六種の転生先である。天は神々の世界であるが、寿命が尽きれば神といえども輪廻する。この輪廻の世界から抜け出し、永遠の悟りの世界に入り、もはや生まれ変わらないことが仏教が目指す涅槃である。こうした輪廻の考え方に大乗仏教の理想とされる菩薩像が加わる。菩薩とは悟りに向かって修行中の人を指すが、大乗仏教では、すぐれた菩薩はすでに涅槃に入れるにも関わらず、この世に苦しむ人々がいる限り何度でも人間に生まれ変わり、人々を救済するというのである。チベットではこの理想の菩薩像を転生活仏に当てはめた。高僧は人々を救うため何度でも生まれ変わり、この世に現れるのである。ダライ・ラマは観音菩薩の生まれ変わりであるとチベットでは伝えられてきた。

3. ダライ・ラマの登場とダライ・ラマ政権の成立

カルマ派が転生活仏制度を始め、活仏教団となったことにより、対抗するゲルク派も同じ制度を取り入れた。1544年ゲルク派の中心であったデプン僧院の住職ソナム・ギャンツォが第三代の生まれ変わりに認定され、1589年、モンゴル布教のために青海で会見したフビライの子孫アルタン・ハーンより「ダライ・ラマ」の称号を贈られた。「ダライ」とはモンゴル語で「広い海」を意味し、チベット語の「ギャンツォ」と同義である。チベットやモンゴルには海はないので、実際には湖を指す。以来歴代ダライ･ラマは皆「ギャンツォ」の名前をもつ（現在の14世はテンジン・ギャンツォ）。「ラマ」はチベット語で「先生」を意味するが、僧侶を指す呼称ともなっている。その後ゲルク派は青海地方を根拠地とするモンゴル部族の長グシ・ハーンの軍事力を後ろ盾に、ダライ・ラマ5世のときに敵対するカルマ派勢力を撃退し、中央チベットを支配する。東チベットの青海地域はグシ・ハーンの支配下であったため、ダライ・ラマの勢力は広範に及ぶこととなった。ダライ・ラマ政権の成立である。

1644年に満州人による清朝が中国に起こると、清朝はモンゴル部族の脅威を封じるためダライ・ラマの権威を利用し、自らも仏教を保護する王であり、ダライ・ラマの施主であるという演出をするようになる。ダライ・ラマはチベット人のみならず、モンゴル人、満州人の宗教的カリスマとなり、チベット仏教を媒介として結びついたチベット仏教文化圏が生まれたのである。このときダライ・ラマは世俗と宗教の両方の権力を手にし、チベットの政教一致の政治体制が始まる。古代王朝以来の統一政権であり、広大な領土であった。だが、古代と違うのは王ではなく宗派が権力を握り、かつ軍事力、経済力は外部勢力に依存していた、という点である。そのほころびはすぐに見え始めるのだが、それはダライ・ラマ5世の死後の話である。

4. ダライ・ラマはどのように選ばれるのか―転生活仏の表と裏―

チベットの人たちは「生まれ変わり」を信じるのだろうか。輪廻を信じる人は多い。転生活仏もあり得ない事ではない、と考えているかもしれない。一般の人にとって信じたい存在なのだ。為政者はそれらしい演出をしてダライ・ラマを選出してきた。輪廻転生の考え方によると、人は死後49日をへて次の母胎に生まれ変わる。まず占い

やご神託、遺言などによって生まれ変わった地方を特定する。そこで先のダライ・ラマの死後 49 日頃身ごもって生まれた男児を探す。候補者に先代の持ち物などを見せて愛着を示すかどうかなどのテストを行う。あるいはご神託を伺って生まれ変わりを認定する。その子供は僧侶としての教育を受けて育てられ、成人すると政務をとる。

だが、歴史を振り返るとほとんどの場合、選定の裏に政治的意図が働いたと推測される。たとえばダライ・ラマ 4 世は 3 世が会談したモンゴル人アルタン・ハーンの甥である。モンゴルからダライ・ラマを選ぶことによって、ゲルク派はいっきにモンゴルの支持を拡大した。また、ダライ・ラマが成人するまでは摂政が代わりに政務をとる。ダライ・ラマ 6 世以降はむしろこの摂政が実権を握り、ダライ・ラマはだんだんとお飾りになっていく。日本の平安時代の天皇と藤原摂関家の関係に似ている。しかし、そのカリスマ性は一般民衆に対しては絶大な力をもち、モンゴルや清朝との外交には大きな役割を果たしたのである。

寺院は祈りを捧げ、儀式を行う聖なる場所である。しかし、そこは富と人心掌握の重要な場所でもある。チベットやモンゴルの有力者たちは民衆の心を掴み、自らの地位を高めるため、競って寺院に寄進をした。寺院は経済の基盤でもあったのである。僧侶は社会でもっとも尊敬される存在であった。生まれや身分に関係なく、能力があれば出世することもできた。政治に参加することもできた。宗教的権威になることもできた。こうした宗教中心の社会が生み出したのが転生活仏制度であったとも言えよう。

最後に―チベット仏教の魅力―

最後に一言、モンゴルや満州の人々、そして世界の人々を惹きつけてきたチベット仏教の魅力とはなんだろうか。ここでは仏教の内容に十分に触れられなかったが、ひとつにはその多様性をあげることができよう。チベットの仏教はインド由来の伝統的な仏教を継承しながら、中国仏教の影響、土着の宗教の影響、民間信仰など様々な要素を取り入れて発展してきた。高度な哲学や「密教」と呼ばれる秘せられた教えから芸術的な絵画や踊り、宗教行事などを含み、多様な文化を形作ってきたのである。また、それらが人々の日常生活のすみずみにまで浸透している。仏教を信じて生きるチベットの普通の人々の真摯な姿こそが私たちの心を捉えてやまないものなのかもしれない。

本稿は、2014 年 4 月 19 日の雲南懇話会での講演にもとづいている。お招きいただいた前田栄三氏および関係の方々にあらためて御礼申し上げたい。

参考文献

1) 石濱裕美子（編著）『チベットを知るための 50 章』明石書店 2004.
2) ダライ・ラマ 14 世（木村肥佐生訳）『チベットわが祖国－ダライ・ラマ自叙伝－』中公文庫 1989.
3) フランソワーズ･ポマレ･今枝由郎（監修）（後藤淳一訳）『チベット』創元社 2003.
4) 田中公明『活仏たちのチベット―ダライ・ラマとカルマパ』春秋社 2000.
5) 山口瑞鳳『チベット』（上・下）東京大学出版会 1987 － 1988.
6) D. スネルグローヴ、H. リチャードソン（奥山直司訳）『チベット文化史』（改装版）春秋社 2003.
7) 長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』冬樹社 1982.
8) W. D. シャカッパ（三浦順子訳）『チベット政治史』亜細亜大学アジア研究所 1992.
9) ダライラマ 14 世（語り）、クロディーヌ・ベルニエ＝パリエス（文）、神田順子（訳）『ダライラマ真実の肖像』二玄社、2009.

Summary

The World of Tibetan Buddhism
— From Introduction of Buddhism to Dalai Lama —

Chizuko Yoshimizu

Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba

Buddhism deeply penetrates the life and society of Tibetan people. Buddhism was introduced into Tibet in the seventh century. Tibetans adopted Buddhism as their state religion in the same manner that Japanese did. Throughout the Tibetan history, Buddhism played an important role in political scenes as a diplomatic tool. Tibetan Buddhism disseminated in Inner Asia and helped Tibetans to survive among strong neighbors during the period of Yuan, Ming and Qing dynasties. They created the system in which religious and political authority is one and the same, i.e., the rule of Dalai Lama, on the basis of the idea of reincarnation. Until now, Buddhism as well as the Dalai Lama has been the core of Tibetan culture and psychological support for not only Tibetan people but Buddhists in Mongolia, Nepal and Bhutan. Tibetan monasteries has contributed to the development of various sciences and cultural resources. Most Tibetan Buddhist sects which were established between the twelfth and fifteenth centuries still survive today.

Tibetans currently live in Tibetan autonomous region and the provinces of Sichuan, Qinghai, Yunnan and Gansu within the People's Republic of China as well as in surrounding areas like Nepal, Bhutan and Ladakh of India. Those who sought refugee outside are scattered all over the world. The Tibetan government in exile is located in Dharamsala, India. What unites these Tibetans is also Buddhism. Being Buddhist forms their Identity. The present paper aims to depict the historical development of Tibetan Buddhism from its origin to flourishing by the establishment of the Dalai Lama government in the seventeenth century.